

## 新聞将棋の始まりから発展へ

山口恭徳

新聞と将棋との関わりは、徐々に変化してきているが、日本将棋連盟の経済面を支える大きな柱は、現在でも新聞社からの契約金である。

新聞に棋戦が誕生してからも一〇〇年以上たつ。ここでは、その始まりから新聞将棋が発展していった経緯を、明治、大正、昭和（初期）の時代ごとに、実際の紙面や年表などを基にして振り返っていく。

江戸時代に徳川幕府の庇護を受けていた将棋家元（大橋本家、大橋分家、伊藤家）は、明治維新により経済的な基盤を失い、終焉を迎えて以後、将棋界は冬の時代に入る。その中で新聞棋戦の始まりは、一筋の光明とも言えるものだった。

現在の将棋界の隆盛を見るとき、各棋戦主催社の強力なご支援、ご協力、さらに苦難の時代を支えてきた先人の貢献・功績は忘れることができない。

### 1 新聞将棋の始まり

明治一〇年代、新聞は政論中心の<sup>おおしんぶん</sup>大新聞と、娯楽中心の小新聞とに分かれていた。大新聞は知識階級を対象にした政論主体の新聞で、小新聞は中流以下の読者を対象にした通俗的な新聞をいうことが多かった。

新聞に初めて詰将棋が載ったのは、小新聞の「<sup>うきよ</sup>有喜世新聞」で、明治一四年（一八八一年）七月一七日付のことだった。

#### 1・1 新聞詰将棋の始まり

明治一四年七月一七日付「有喜世新聞」

【資料①】一世名人大橋宗桂著『術知象戯力草宗桂指南抄』Ⅱ元禄一六年（一七〇三年）刊Ⅱ第四一番から引用。持ち駒に誤りがあり、「角金桂」ではなく、「角金歩」だった。以後、月に一回程度連載され、約一年続いた。

#### 1・2 新聞指し将棋の始まり

明治三二年（一八九八年）一月一日付「<sup>よふすちようほう</sup>萬朝報」

【資料②】伊藤宗印八段（香落ち）对小野五平七段（勝ち）戦明治二九年二月九日付から詰将棋を連載していた「萬朝報」は、同三二年一月一日付から新聞では初めて実戦、つまり指し将棋





／二／二五）▽福岡日日新聞（四四／六／二）▽東京朝日新聞（四五／一／二）▽東京日日新聞（四五／三／三）

明治維新以来、江戸幕府からの保護を失うなど将棋界は苦しい道を歩んでいたが、新聞棋戦の開始により、ようやく明るい光が差し込んできた。

## 2 新聞棋戦開始の功労者・三木愛花<sup>みきあい</sup>

### 2・1 略歴

三木愛花は明治／大正時代の新聞記者。文久元年（一八六一年）四月五日生まれ。上総国山邊郡大網町（現・千葉県大網白里市）出身。本名は貞一。昭和八年二月六日死去。

『東京新誌』『朝野新聞』『東京公論』記者、新聞『寸鉄』創刊、明治二六年に黒岩周六（涙香）が創刊した萬朝報社に入り、大正一二年まで記者として勤める。相撲通で、また将棋欄を初めて創設したことで知られる。著作に漢文体戯作『東都仙洞綺話』『東都仙洞余譚』『仙洞美人譚』など。

### 2・2 将棋界と愛花

指し将棋（実戦）の棋譜を初めて掲載した新聞が『萬朝報』で、明治三十一年（一八九八年）一月一日付だった。棋戦を初めて企

画した新聞も『萬朝報』で、同四一年九月一日付から「高段名手勝継将棋」を連載した。発案者は、どちらも愛花だった。

新聞棋戦の開始により、棋士は初めて対局料を支払われるようになった。段位にかかわらず、一局二円だった。江戸幕府からの保護を失い、苦難の道を歩んでいた将棋界にとって、新聞棋戦の開始は一筋の光明になった。また、愛花は東京市京橋区明石町の自宅を本拠にして、月刊の将棋雑誌『将棋新報』を創刊（四一年一二月号）、毎号いろいろなテーマで執筆した。

さらに、交流の少なかった棋士同士の団結を唱え、初の棋士団体「将棋同盟會」の結成に尽力した。翌四二年八月八日に発会式を行い、同年一〇月三日に「将棋同盟社」と名称を変更した。

当時の棋士は、ほとんどが副業を持ち、裕福ではなく、対局する場合も着流しだった。改まった席などでは、袴を着けてもいたいと考えた愛花は、数着のセルの袴をいつも備えていた。大正六年（一九一七年）二月には、関根金次郎八段が昇段点を取っていた弟子の土居市太郎七段の八段昇段を認めなかったことなどから愛花と対立、ついに関根は将棋同盟社を退社する。

一二年九月一日の関東大震災により、萬朝報の社屋や愛花の自宅が焼失、「将棋新報」も廃刊になった。まもなく愛花は萬朝報を退社した。

その後、土居市太郎八段の主幹による月刊誌『将棋新誌』（一四

年一月号)が創刊され、愛花も毎号のように健筆を振るった。

愛花は昭和八年(一九三三年)二月六日に満七一歳で亡くなるが、直前まで『将棋辞典』の刊行を企画し、実際に取り上げる項目を検討している最中だった。

### 3 最初の棋士団体「将棋同盟會」

#### 3・1 明治維新による急激な衰退と新聞棋戦の開始

明治四一年(一九〇八年)九月に初の新聞棋戦(『萬朝報』の「高段名手勝継将棋」)が始まる。以後、各新聞社が棋戦を連載するようになる。

新聞棋戦の開始により対局料が支払われるようになったことが、棋士にとってはとても大きな出来事だった。それでも副業がなければ生活することはできなかった。

#### 3・2 「将棋同盟會」の結成

対局が増えるにつれ、自然に棋士が顔を合わせることも増えてくる。前述したように「萬朝報」記者の三木愛花は、棋士がばらばらでは好取組も見られないし、世間にも評価されにくいので、かねてから棋士の団結を望んでいた。愛花は「将棋新報」誌上で棋士に団結を訴え、明治四二年八月八日、ようやく初

棋士団体「将棋同盟會」の結成まで漕ぎ付ける。

同年一〇月三日に「将棋同盟社」と改称(「會」より「社」の方が、規模が大きく見える、という意見から)する。以後、毎月第一日曜に定式会を開くことに決め、対局を行った。同盟社専属棋士は二三人で、「将棋新報」(同四二年一二月号)に名簿が載っているので転記する。

四段	石原 勇吉	四段	太田 忠翁
五段	堀川 英歩	四段	岡村豊太郎
四段	豊島太郎吉	二段	奥野 一香
四段	土居市太郎	四段	黒川 潭龍
六段	川井 房卿	六段	矢頭 喜祐
六段格	勝浦松之助	六段	矢島新太郎
四段	勝山庄次郎	四段	寺田淺次郎
三段	田中武次郎	六段	簗 太七郎
五段	村上由之助	四段	森 永龍
五段	村越 為吉	八段	関根金次郎
四段	上田 愛桂	三段	鈴木 香芸
八段	井上 義雄	(姓名いろは順)	

#### 3・3 棋士の副業(段位は当該棋士の最高位を表す)

明治時代の棋士は、将棋を指すだけでは生活が成り立たな



かったため、ほとんどが副業を持っていた。例を挙げてみる。

・飯塚力蔵（龍馬）八段↓貸し座敷（遊郭）の主人。駒台の発明者。※「力蔵」は「力造」と記す例もある。

・川井房卿七段↓べつ甲細工業。

・蓑太七郎七段↓富山の薬行商。

・矢島新太郎（五香）七段↓小間物屋（日用品、化粧品などを売る店）。「小間新さん」と呼ばれていた。

・村上由之助（桂山）六段↓常磐津節（浄瑠璃の流派の一つ）の太夫（語り手）。

・豊島太郎吉六段↓材木商、駒師。

・石原勇吉五段↓八百屋。「八尾勇さん」と呼ばれていた。

・奥野一香四段↓盤駒商店、駒師。

・木見金治郎九段（大阪）↓古鉄商、のちにうどん屋を副業とし、弟子の大野源一九段が出前持ちをしていたことは有名な話。

#### 4 井上義雄八段と「将棋同志會」

関根金次郎八段（のちの十三世名人）と並び称された井上義雄八段の評伝と、その将棋団体「将棋同志會」を紹介する。

関根は三歳年上の井上にまず名人に就位してもらいたい、と公言していた。そして、数年後に自分に名人位を譲ってもらう

腹積もりだった。ところが、小野五平十二世名人が生存中の大正九年に井上は亡くなり、「井上名人」は実現しなかった。

#### 4・1 井上八段略歴

元治二年（一八六五年）、山城国（現・京都）伏見町字油掛生まれ。本名・池上益太郎。生家は扇子屋。大正九年（一九二〇年）八月四日、五六歳（数え）で亡くなった。八歳の時に伏見町在住の原田仁平二段に手ほどきを受ける。一六歳で大阪の小林東伯齋八段（天野宗歩門下）から二段を許される。一八歳で三段、二三歳で五段、二八歳で六段、三〇歳で七段、明治三九年（一九〇六年）八段。連珠は八段、囲碁は四段。東京の自宅では「囲碁・連珠・将棋教授」の看板を掲げた。

#### 4・2 土居名誉名人の井上八段評

土居市太郎名誉名人の回顧録「思い出の五十年」（雑誌「近代将棋」連載）によると、「（井上八段の）棋風は非常にすぐ、且つ策戦の駆引も巧みで、押しも押されぬ棋界の第一人者であった」「下手名人の称あり、駒落将棋は天下一品」だった、という。

関根八段との対戦成績は、通算三勝三敗一持将棋と五分だったが、人気では、関根にかなわなかった。「井上先生は品行方正

で一切悪いうわさを聞かないのに、関根先生に比し人気の立たなかったようである。その理由は気持が陰気で消極的で、芸能人に必要な楽天的のところが少ない」ところにあつたようだ。

#### 4・3 将基同志會の結成

初の棋士団体「将基同盟會（のち将基同盟社）」は明治四二年八月八日に結成されたが、翌四三年一月一六日に井上八段、矢頭喜祐六段らが脱退して新たに「将基同志會」を結んだ。

明治四一年九月に「萬朝報」が新聞棋戦を開始してから、ほかの新聞社でも棋戦を立ち上げる動きが出てきた。元「国民新聞」社員で、新聞販売店をしていた佐藤功二段（のちに「棋狂老人」の筆名で観戦記を執筆）から国民新聞でも棋戦を企画し、最初に関根対井上の八段対決を掲載したい、という要請があつた。

関根、井上は対局を了承したが、将基同盟社の幹事・堀川五段、岡村四段、奥野二段から、こういう大事なこととは同盟社を通してほしい、承認できない、との強硬意見が出された。

同盟社の世話役だった三木愛花は、「萬朝報」の記者でもあり、以前から関根―井上戦の対局を希望していたが、実現していなかった。恩義のある愛花の立場を配慮しての意見だった。それほど反対意見があるのでは、と関根は対局中止を決めた。

反対に井上は、この機会に関根を中心とした同盟社を脱退し、

国民新聞を背景に新たに「将基同志會」を結成した。矢頭喜祐六段、勝浦松之助六段、村上由之助五段、大崎熊雄二段、溝呂木光治初段らが参加、半年も立たずに棋士団体は分裂してしまった。その後、井上は「国民新聞」から「中央新聞」に移ることになる。

#### 5 関根八段、将基同盟社を退社

明治四二年に初めて誕生した棋士団体の将基同盟社は、関根金次郎八段を中心棋士に「萬朝報」記者の三木愛花が世話役を務めて運営されてきた。ところが、大正六年（一九一七年）に大問題が起き、関根と愛花との間に亀裂が走る。

##### 5・1 経緯① 関根、阪田に敗れる

大阪の阪田三吉八段は、「打倒関根」を旗印にして戦ってきたが、大正二年に初めて関根に平手で勝ち、四年には小野五平十二世名人の許しを得て八段に昇進した。同年、将棋の殿様やなぎざんやうしといわれた柳澤保恵伯爵は関根―阪田戦を企画したが、直前に関根が体調を崩して辞退（関根が阪田の先手番を主張したが、認められなかった）ので対局を断った、という説もある）。そこで井上義雄八段と阪田が戦い、阪田が平手で勝った。

同六年に柳澤伯爵は関根—阪田戦をもう一度企画する。一〇月八、九日に行われた対局は、天下分け目の大一番として、新聞各紙が大きく取り上げた（棋譜は「大阪朝日新聞」連載）。本局に関根は敗れ、「萬朝報」「将棋新報」の講評権を手放すことになる。

## 5・2 経緯② 土居七段の八段昇進問題

関根の一番弟子の土居七段は、大正六年九月の将棋同盟社の定式会で八人抜きして八段昇進規約に達していたが、まだ二九歳と若いのもう少し待ってからということになっていた。

ところが、関根を破った阪田と同年一〇月一六、一七日に平手で土居が勝ったことから、将棋同盟社幹部と土居の後援者は関根に八段昇進を迫った。関根は「自分のお鉢に関係するから免状は出せぬ」と断った。当時、小野五平十二世名人は八七歳（数え）の高齢で、次の名人につい



関根八段（左）と阪田八段との天下分け目の一戦Ⅱ『国民新聞』大正八年一〇月九日付

て、関係者の間でいろいろな思惑があった。実際に将棋界で活躍していた八段は、井上、関根、阪田の三人。この中から次期名人が決まると考えられていた。中でも最有力候補だった関根にとつて、新たに八段が誕生することは、自分の名人襲位に差し障ると思えて土居の八段昇段を認めなかった。

結局、将棋同盟社は関根の許しを得ぬまま土居の八段昇進を決定する（一一月四日）。反発した関根は翌一二月に将棋同盟社を退社した。その結果、「萬朝報」「将棋新報」の講評権は土居に移った。

## 5・3 関根、新団体「東京将棋倶楽部」を結ぶ

退社した関根は、弟子の金易二郎七段らとともに同七年六月二〇日、新たに棋士団体「東京将棋倶楽部」（柳澤伯爵の命名）を結成する。その後、関根は土居の八段昇進を認め、同八年三月一六日に催された八段披露会にも出席して免状を手渡した。

小野十二世名人が同一〇年一月二九日に九一歳（数え）で亡くなる。同年五月八日に東京将棋同盟社（土居派）、東京将棋研究会（大崎熊雄七段派）、東京将棋倶楽部（関根派）の三派が合同で関根の名人披露会を開催、愛花も「賛助」の立場で出席した。将棋同志会を率いていた井上八段は同九年八月四日に亡くなっていた。



愛花と疎遠になっていた関根だが、同二年九月一日に起こった関東大震災で愛花の自宅が焼失したと聞くと、自分も家を失っていたにもかかわらず、弟子の渡辺東一四段に指示して見舞金を届けて愛花を感激させた、という。

## 6 小野十二世名人、九一歳で逝去

### 6・1 小野五平十二世名人略歴

天保二年（一八三二年）一〇月六日生まれ。阿波国脇町（現・徳島県美馬市）出身。幼名は土井喜太郎。『幕末の棋聖』天野宗歩から指導を受ける。万延元年（一八六〇年）三段、文久元年（一八六一年）四段、同三年五段、慶応三年（一八六七）六段、明治二年（一八七八年）七段、同三年一〇月八段、同三年五月八日に名人披露会開催。小野は大正一〇年（一九二一年）一月二十九日に亡くなる。九一歳（数え）。

### 6・2 小野名人の訃報記事

大正一〇年（一九二一年）一月三〇日付

①「大阪朝日新聞」から阪田三吉八段の追悼談話

『昨年十月名人が九十歳祝賀大棋會に私が参加した際、翁は私に對つて「俺は若い時にある暗示によつて九十一、二歳が定命

といふ事を感じし確信してゐる、今度の會後名所などを巡歴し度い就いては名人の繼承の事も生あるうちに考慮して置かねば甚だ心懸りだ」との事に

私は先輩関根八段が繼ぐの至當なる事を力説しました、現今棋壇に立つものにて準名人の八段格は氏を除きて土居氏と自分だけで土居氏が関根門下の人なればこれに異存ありとも想はれぬ、「迷ふ事なく関根氏に御決定あるが安泰です」と重ねて進言した事でしたが、其時の翁が言箴をなして長逝されたのは棋界の為め痛惜に堪へませぬ（原文のママ）』

この記事から阪田八段が「関根名人」襲位を明確に支持していることが分かる。

### ②「報知新聞」から関根金次郎八段の追悼談話

『小野名人は先代名人伊藤宗印氏の後を承けて名人となられた人である

阿波の産で同郷の誼で故芳川顯正伯の引立てを受けて斯界に盡した人で維新の際将棋が衰微してゐたのを同氏の力で挽回して現在では柳澤伯一條二條公公平伯を始め華族界に勢力を得た現在斯界の名人は大阪の阪田八段横濱の矢島七段千葉の勝山五段東京の森五段其他多くあるが小野名人は極最近まで日本俱樂部に通つて後輩の為め指道の勞を執つた人格高い人で惜しみても餘りある次第だ（原文のママ）』

## 7 関根、十三世名人に

### 7・1 大崎熊雄八段の回顧録

大正九年ごろから関根金次郎名人誕生までの経緯を、大崎熊雄八段（贈九段）が詳細に述べた文章を紹介する。年齢などで誤りもあるが、当時の状況、経過をよく表している。

《小野名人の死によつて名人問題はいよいよ本舞臺には入つたが、當時實力から言へば第一に坂田三吉師に指を屈せねばならなかつた。土居師も新しく八段になり坂田師とは一勝一敗の成績であつたが経歴人氣の點では、やや坂田師に劣るものがあつた。

しかし名人問題が起るや「将基同盟社」の機關雜誌は、實力あり且前途に春秋の多い土居師を名人にすべしと主張し、毎月のやうに有名な三木愛花翁が筆をとつて居られ、そして實際のところをいふと関根先生が一番影が薄いやうであつた。兎も角、関根・坂田・土居の三派は、小野名人の死と同時に各々行動を開始した。（中略）坂田三吉師には關西将棋界は勿論大阪朝日が絶對の支持を與へて居たし、東京でも柳澤伯が實力主義の立場から支持してゐられたやうである。関根先生の方には金（當時七段）が筆頭にひかへて居たが金師もまだ若い頃で社會的な力は極めて弱かつた。しかし其處へ力をかさうとしたのが、竹内翁<sup>2</sup>と私と、それに東京朝日の桑島俊（鈍聴子）氏である。

其間種々の経緯はあつたが、坂田師には私が柳澤伯邸で説き、三木氏には竹内翁が會つて、結局関根先生の「名人」繼承が実現するやうになつたのである。関根先生の五十五歳の時であつたと思ふ。（原文のママ、後略）

この文章は昭和一〇年（一九三五年）の大崎八段の口述を、「国民新聞」将棋欄で「棋狂子」の筆名で觀戦記を担当していた倉島竹二郎が筆記したもの（「将棋世界」昭和一五年八月号掲載「大正棋界の發展」宮本弓彦執筆から）。

### 7・2 関根八段の名人受諾談話

《今夕坂田八段の参列はなかつたが代理の人が來て呉れた、勿論其處には既に諒解が成立しているから私は潔く推挙を受けた次第です、私は棋界の此推薦に行つて小野家の後繼者として立つて行く事は無上の光榮と思ふと同時に棋界の情実を一掃して嚴正の態度を持して行きたい覚悟です（原文のママ）》

大正一〇年（一九二二年）二月五日付「報知新聞」

## 8 東京将棋連盟創立

### 8・1 三派合同への機運

大正一〇年五月八日に開催された「関根金次郎名人披露會」

は、三派に分かれていた東京の棋士団体を統一する呼び水になった。当時、東京の棋士団体は次の通り。東京将棋倶楽部（関根金次郎名人派）、東京将棋同盟社（土居市太郎八段派）、東京将棋研究會（大崎熊雄七段派）。

棋戦を主催している新聞社にしても、一派だけでは同じような顔触れによる対局になり、新味がなく、盛り上がりには欠けた。当時の新聞棋戦は、ほとんどが勝ち抜き戦で、所属棋士の少ない団体は、なおさら切実な問題だった。

### 8・2 三派出場棋戦「東西対抗報知将棋」の開始

具体的な動きは「報知新聞」主催の三派出場棋戦「東西対抗報知将棋」の開始だった。同一二年三月一七日付から連載が始まった。

対局者の顔触れは、東軍を東京将棋倶楽部の部員、西軍を東京将棋同盟社の社員と東京将棋研究會の會員の連合軍とした。ちなみに、この時の対局料は段一円で、つまり八段なら八円の対局料だった。初戦は大崎七段（香落ち）対寺田梅吉五段戦で、大崎が勝った。以後も大崎が勝ち続け、結局七連勝した。

報知新聞には、愛棋家で知られた太田正孝副社長（のちの自治庁長官）と将棋欄担当の生駒彥藏（筆名・翱翔ⅡこうしょうⅡ鳥が空高く飛ぶこと）が在籍し、棋戦の充実を考え、大崎七

段や三木愛花らとともに三派合同を進めていた。

ところが、同年九月一日、関東大震災が起り、新聞社はほとんど被災した。焼かれなかったのは報知、東京日日、都の三社だけだった、という。反対に最も打撃を受けたのは愛花が在籍する「萬朝報」で、致命的な被害を受けた。時事新報、国民、毎夕、読売、東京毎日、やまと、中央の各新聞社も手痛い打撃を受けた。

最も早く立ち直ったのは、大阪に大資本を持つ東京日日、東京朝日の両新聞社で、ここから部数を急速に伸ばしていった。雑誌では将棋同盟社発行の「将棋新報」が廃刊になった。この年、大崎七段後援会の大崎會が「新棋戦」を創刊したが、第六号で震災に遭い休刊した（大正一五年五月に第二巻第一号を復刊）。

### 8・3 「東京将棋聯盟」成る

大正一三年（一九二四年）九月八日、三派が合同して「東京将棋聯盟」を結成した。現在の日本将棋連盟は、この日を創立記念日に定めている。關根名人を名誉会長、土居八段を会長、大崎、金易二郎の両七段を副会長に選んだ。同時に太田正孝、生駒彥藏、中島富治、海老塚薫、石山賢吉、蟠崎英朋の諸氏が名誉顧問になった。

参加棋士は、關根、土居、大崎、金のほか溝呂木光治七段、花田長太郎七段、岡村豊太郎六段、宮松関三郎六段、石井秀吉

六段、木村義雄六段、寺田梅吉五段、飯塚勘一郎五段、小泉兼吉五段、金子金五郎五段、平野信助五段、山北孫三郎五段、根岸勇四段、渡辺東一四段、萩原淳四段、鈴木禎一四段の合計二〇人。

また同日、大崎、金の八段昇段が発表された。この年、「大崎会」の後援会長・石山賢吉ダイヤモンド社社長らが両者の八段昇段を関係者に根回ししていた。土居八段は反対したが、太田副社長の説得に条件付きで同意した。その条件は、名目は八段でも七段格の手合(半香)で対局するという「指込手合」の実施だった。大崎、金に続き同年九月(一〇月説もあり)、大阪の木見金治郎七段が、翌一四年二月には花田七段が八段に昇段した。

## 9 阪田の名人僭称問題

大正一四年(一九二五年)三月一二日付「大阪朝日新聞」は「坂田八段をいよいよ名人に推薦 京阪神の多数有志から」と題し、後援者に推された阪田三吉八段が名人を名乗るまでの経緯を大きく報道した。

### 9・1 阪田八段が名人をとえた理由

東京将棋連盟の結成から約半年の間に四人が八段に昇段した。それまで将棋界で実質的に活躍していた八段は、阪田と土居市

太郎の二人だった。阪田の後援者は、このままいけば関根金次郎十三世名人の後継者は当然先輩の阪田と考えていたことだろう。ところが、わずか半年の間に八段が四人増えるという「八段乱造」とどうとう我慢できなくなったことが最大の理由だった。

### 9・2 「大阪朝日新聞」の名人宣言記事

阪田の真情としては「寧ろ無段を標榜して『何等の拘束なく自由に手合せして生涯を将棋道に捧げたい』との信念」(大正一四年三月一二日付「原文のママ」以下同様)を抱いていた。ところが、阪田は恩人とも言うべき後援者からの強い要請を断りきれなかったのだ。「日本麦酒の高橋龍太郎、ダイヤモンドの佐田富三郎、大阪俱樂部の平田讓衛、観音林俱樂部の那須善治、清交社同人、銀行俱樂部の坂野兼道、王子製紙の堀越重助の諸氏はその部の代表の意味を以てまた個人としては特許辨理士の江田邦太、(中略)京都の有力者等の紳士一齊に起つて坂田氏名人推薦を發議したところ斯界の愛護者素人棋客の高段者である伯爵柳澤保恵氏は『当方より御相談願はんと豫てより心掛け居り候こと、全然同感大賛成に有之候、現時玄人筋の人物無暗に昇段の事実を見心密かに嘆息致し坂田氏に何となく気の毒に存居候際として何卒至急名人に昇格の議希望の至りに不堪候云々』と即座に共鳴し來り、更に伯の棋友福島行信、久米民之助、

服部金太郎、大橋新太郎氏等東京紳士棋客の団体である日本倶楽部よりも聲援しこゝに賛成者といふより首唱者と見るべき士八十餘名に及んだ、固く辭してうけなかつた坂田氏も感激し遂に名人樹立を快受することゝなつた」という経緯だつた。

### 9・3 東京将棋連盟の決議

「阪田名人」誕生に驚いた東京将棋連盟は、翌一三日に緊急評議委員会を開き、関根名人在世中にもかかわらず名人を名乗つた阪田とその後援会の行動に対し、次の反対決議を行つた。

#### 《決議》

- 一、東京将棋聯盟は八段阪田三吉氏の名人昇格を認めず
- 二、阪田氏が実力を以て名人の段位を勝ち得んとして東京将棋聯盟に挑戦する場合将棋聯盟は代表選手を選抜してこれに開戦することを辞せず

#### 右決議す

大正十四年三月十三日

#### 東京将棋聯盟

元來名人は一時代に一人に限るのは、數年来将棋界の傳統的不文律で、現に名人關根金次郎の嚴存する今日、更に他に名人を樹立することは、将棋界の慣習を無視した暴挙で素人の推薦のみで解決せんとするは将来に悪弊を残すものである（原文の

ママ、以下略》

大正十四年三月一四日付「報知新聞」

### 10 将棋の読売 大躍進！

#### 10・1 八段同士の大型棋戦開始

大正時代の末期、棋士として実際に活躍していた八段は、土居市太郎、大崎熊雄、金易二郎、木見金治郎、花田長太郎、木村義雄（大正一五年（一九二六年）四月一三日に八段免状授与）の六人だつた。関根金次郎名人は新聞棋戦の優勝者との模範試

将棋界の争覇戦  
八段大試合開始  
第一回本邦棋士大戦に動し  
きの本邦棋士大戦に動し

新鋭と老巧  
敵假面子  
敵假面子  
敵假面子

八段優勝手・合棋譜  
八段優勝手・合棋譜  
八段優勝手・合棋譜

八段同士の大型棋戦「東西将棋八段優勝手合棋譜」の第一局開始を伝える「読売新聞」鋭戦記。昭和二年一月一八日付



先勝する  
両士の関係  
先勝する  
両士の関係



合を行うことが多かった。「八段乱造」を非難して名人を僭称した阪田三吉は、東京将棋連盟と絶縁状態に陥り、孤立していた。

ところが、八段が増えたことにより八段同士で戦う大型棋戦が続々と誕生する。その結果、将棋界は飛躍的に発展する。

まず動き始めたのが月刊誌「講談倶楽部」（大日本雄辯會講談社・現・講談社）で、全八段出場の「平手対局八段總出勝繼大棋戦」を企画し、昭和二年三月号から連載した。

新聞社では、読売新聞が最も早く大々的に取り上げた。昭和二年一月一八日付から始まった「東西将棋八段優勝手合棋譜」（全八段出場・花田八段優勝）では、従来の一段扱いから四段扱いのスペースにし、対局料も八段一人一局七五円を支払った。それまでは八段だと一人一局一〇円前後だったので、大幅な増額になった。

以後、報知新聞による全八段出場「報知将棋大リーグ戦」（同二年一月二二日付）、東京朝日新聞による名人八段出場の対抗戦「本社将棋新争覇戦」（同二年二月二日付）、国民新聞による全八段出場「名家敗退国民新棋戦」（同四年三月三一日付）など、各新聞で大型棋戦が続々と開始された。

## 10・2 「読売新聞」の成り立ちと発展

「読売新聞」は明治七年（一八七四年）十一月二日に創刊さ

れた。尾崎紅葉の「金色夜叉」や高山樗牛の「瀧口入道」などを連載して「文芸新聞」といわれていた。

大正一三年（一九二四年）二月二五日に第七代社長に就任した正力松太郎は、さまざまな新企画を立てて実行していた。例えば、ラジオ版の創設（同一四年一月二五日付）、対立していた本因坊秀哉と棋正社の雁金準一七段との囲碁対局を実現（同一五年九月二七日付から連載）、昭和に入ってから全米選抜プロ野球団の招聘（昭和六年＝一九三二年＝一〇月）、再度の招聘（同九年一月）、東京巨人軍の創設（同九年二月）など、数多くの話題を提供した。正力社長の就任前は約五万五千部だった発行部数は、昭和一三年には百万部を超える大躍進を遂げた。

## 10・3 菅谷北斗星の登場

「観戦記文学の草分け」として知られる菅谷北斗星は、明治二八年（一八九五年）十一月二七日、栃木県生まれ。本名・要。昭和三七年一月二一日、六六歳で亡くなる。大崎熊雄八段（贈九段）の助手として観戦記を執筆、その後、読売新聞社に入社し、昭和二年四月二四日付から観戦記を執筆、一人で書き続ける。次々に新企画を立てて、昭和一〇年に名人戦が始まるまでは将棋の読売とうたわれた。戦後はタイトル戦「九段戦」「十

段戦」の創設に力を尽くした。

## 10・4 読売新聞社主催による戦前の主な棋戦

「名人八段五人拔大棋戦」

「日本選手権争奪大棋戦」 ※木村八段優勝

「木村金子十番将棋」 ※木村八段の四連勝で打ち切り

「名人八七段勝抜戦」

「坂田木村大棋戦」(南禅寺の決戦) ※木村八段の勝ち

「坂田花田大棋戦」(天龍寺の決戦) ※花田八段の勝ち

## 11 実力名人戦の発案と開始

### 11・1 関根名人の大英断

昭和一〇年(一九三五年)、徳川時代から三百年以上続いた終生名人制は、関根金次郎名人の大英断で実力による短期名人制へと大きく変貌を遂げることになる。その声明書は次の通り。

《聲明書

本會は時相の推移と棋界の現状に鑑み昭和十二年度を期して三百年傳統の一世名人の制を廢しこれに代ゆるに短期交代の名人制をもつてし名人の選定は専ら實際對局の成績によることゝ

し近くこの對局を開始することに決せり

昭和十年三月廿六日

日本将棋聯盟會々長

金易二郎

関根名人談 私は棋界の現状を考慮し、かねがね後進に道を譲りたいと考えてゐたが、聯盟では私の意のあるところを諒察され、昭和十二年七十歳をもつて名人位を退くことにしてくれました、また同時に舊制を廢し時代に適應せる新制度を講じ棋界百年の計を立ててくれた、私はこの制度の改革に寄與して年來の念願たる棋道の隆盛に寸功を致し得たることを衷心からよろこんでゐる(原文のママ)》

昭和一〇年三月二七日付「東京日日新聞」

### 11・2 立案者の中島富治

なかしまとむじ

実力名人戦の実質的な立案者は、日本将棋連盟顧問を務めていた中島富治(号・融雪。昭和三十一年一月二三日に七〇歳で逝去)だった。中島は退役海軍主計官で、高島屋飯田貿易の顧問をしていた。初めは土居市太郎八段の後援者だったが、次第に将棋界全般にかかわるようになった。

では、中島はどのように考え、根回しをし、実力名人戦を実行していったのだろうか。中島が「週刊朝日」の昭和二五年三

月五日号から五月二八日号まで一回にわたり連載した。将棋  
隨筆盤側三十年”の中から、その個所を引用する。

《私が二度目に棋界の世話役を引き受けたのは昭和三、四年頃であつた。その頃将棋はだいぶ盛んになつてはいたが、それともきわめて低調なものであつた。因襲久しき封建制は容易に改まらず、積弊が少なからず棋界の隆昌を妨げていた。》(略)

いろいろと考えたあげく、到達した結論は、名人制度の變革と名人戦の決行であつた。三百年の伝統を持つ一代名人の制度を廢して、實力により名人を選出することであつた。純然たる選手権制度である。(略)

だんだんに機は熟して来た。折よく甚だ好都合な情勢にも恵まれて、十分な自信を持ち得るに至つたので、意を決して麹町三年町に関根名人を訪ねた。昭和十年一月十四日、風の強い、寒い日であつた。

関根名人夫妻は珍客人来とばかり心をこめて歓待してくれた。早速草案を取り出して要談に入つた。棋界の現状から将来にわたつて子細に検討し、改革のやむを得ざること、改革のもたらす効果の見通しなどについて詳しく述べた。名人はほとんど口をきかず、時々眼をつぶつて考えていたが、やがて口を開いていとも静かに「結構です、どうぞおやり下さい」といつて、くりかえし私の苦心に対して謝意を表するのであつた。(略)

越えて三月十八日、全八段を拙宅に招集した。木見は大阪から何ごともご一任すると申入れて来た。この日一新聞(注…東京日日新聞)が「関根名人退位か」の大見出しで、三段抜きのトップニュースとしてこの会同(注…会合のこと)を大きく取扱つたので、早朝から新聞社、通信社その他の多数の人々の来訪を受けた。電話のベルは鳴りつづけた。門前には数台の自動車がとまつて、何ごとかと近所のひとびとを驚かした。

やがて全員参集。土居、金、大崎、花田、木村、金子の六人であつた。会議は階上の一室で開かれた。彼等はけさの新聞で大体推察していたが、草案を見てさすがに驚いたようであつた。二時間にわたる質問応答ののち全員喜んで賛成、小修正を加えただけでこれを可決した。ただこの企画が一年七八万円を要する点において実現をあやぶむ気配が濃厚であつた。今の力ネにすれば千万円にも当るわけで、あやぶむのが当然であつた。この会談は全員棋界の前途を思う熱意に燃え、極めて真剣な、しかも和氣あいあいたるふんいきのうちに行われた。

つづいて廿五日山王境内の茶屋に臨時総会を開いて付議したが、七段以下に異論があつて紛糾五時間にわたつた。名人戦に反対するのではなく、八段のみが余りに恵まれるというのであつた。結局、一年後に期待せよとなだめて同意させた。

これでこの改革は成立したのであつた。成立はしたが、いよ

いよ名人戦をはじめるまでにはいろいろ厄介な問題が起つて、一そう名人戦をやめてしまおうかと痼癪をおこしたことさえあった。(原文のママ)》

### 11・3 阿部真之助の内幕記事

名人戦の主催新聞は、東京日日新聞・大阪毎日新聞だった。昭和和一八年(一九四三年)一月一日、東京日日新聞と大阪毎日新聞は新聞統制により題字を「毎日新聞」に統一し、現在に至っている。

中島とともに名人戦の成立にかかわったのが東京日日新聞学



芸部長の阿部真之助(のちNHK会長)だった。

「サンデー毎日」

誌上に終生名人制への批判記事を執筆した阿部に對して、かねてから同じ意見を持っていた中島は、同紙将

棋担当記者の黒崎貞治郎(注:「梅木

三郎」の筆名で「長崎物語」「空の神兵」などを作詞)を通じて実力名人戦の創設を持ちかけた。

当時の内幕を「近代将棋」昭和二五年四月号(創刊号)に阿部が「名人戦の始まった頃」と題して寄稿しているので引用する。

《現在でもそうだと思うが、大きな新聞社では、お抱え相撲のようにして、専属の棋士を抱えていた。中島のいうには、自分の勢力下には、花田、塚田、坂口、加藤等々の精鋭分子がある。木村は別派だが、いよいよ名人戦が始まれば、次期の名人たる公算は、木村に一番大きい。だから木村がこれに反対する理由がない。最も難関だと思われるのは、土居の一門だ。土居は棋界に一時期を劃した天才で、もし関根というものがなかつたら、とつくに名人を襲うべき人だった。不幸にして関根に頭を押えられ、その間に最盛期をすごしてしまつた。今にして実力をもつて名人位を争う如きは、彼の最も不快とするところであろう。しかし土居が、毎日新聞に専属していることは、僥倖である。毎日の発企として名人戦を始めるなら、彼は義理合ひ上、反対することはできないだろうと、いうのだつた。しかし私の懸念は、関根が果して、快く引退を決意するや否やだつた。(原文のママ)》

関根名人の胸中はどうだつたか。作家で、観戦記者の倉島竹二郎は、その著書『関根金次郎物語』の中で、次のように当時の関根の言葉を書き残している。

《先代名人の小野さんは六十九歳で名人になられたが、九十一歳までおられたから、わしは二十二年間も名人の待ちぼうけをくった。自分の弟子をほめるのはどうかと思うが、若いながら木村義雄などは名人の器うつわのような気がするし、他にも優秀な棋士が沢山いる。そうした有望な棋士たちにわしがなめたと同じような思いをさせたくない。だからわしは何とかして後進に自分の地位を譲る道はないかと単に考えていた。それが中島富治さんとの話し合いで一代制の名人の廃止から実力名人戦による名人へと具体化したのだが、最初わしは九段制を考えてそれを主張したことがある。諸君も御承知のようにこれまで八段以上はなく九段は名人と同じだが八段のもう一段上の九段をつくり、その九段の中から成績抜群の者に名人を譲ろうかと思つた。しかし、九段をつくるというだけでは新聞社にとつてもう一つ魅力がない。どうしても名人戦ということにせぬとバツと派手にはゆかぬ。新聞社としてはそのことで沢山の金を出すのだから、読者に受けるようにウンと派手にしたいのは当然で、それやこれやで実力名人戦という制度になつたのである》

実力名人戦が開始されて約八十年たち、現在の将棋界の隆盛は、この関根名人の大英断によるものと言えるだろう。

特別リーグ戦の対局料は八段一局一人三百円（もり、かけそばが一〇〇一五銭、公務員の初任給が約七十五円の時代）と高

額（七段…百二十円、六段…百円、五段…八十円）で、それに準じてほかの新聞棋戦の対局料も上昇し、八段にとつて以後数年間は、経済的には最も潤つた時代だったかもしれない。

実力名人戦が開始された昭和一〇年の十一月、関西の神田辰之助七段の八段昇進を巡って日本将棋連盟は分裂するが、約半年後に統一される。

## 12 南禅寺の決戦〜阪田三吉対木村義雄戦〜

昭和十一年（一九三六年）六月に棋士団体の「将棋大成会」が結成され、東西の将棋界は統一したが、関根金次郎十三世名人の在位中にもかかわらず「名人」を自称して将棋界でただ一人孤立していたのが、関西

の棋聖 阪田三吉だった。



読売新聞社の十年來の懇請に応じて阪田は、指し盛りの八段二人、木村義雄、花田長太郎と対局することを決意する。まず、木村との対局は昭和十二年二月五日から一日までの一週

阪田出馬を伝える読売新聞の記事  
昭和十一年二月二十四日付



間、持ち時間各三〇時間という異例の条件で、京都市洛東「南禅寺」で行われた。後手番阪田の第一手△9四歩に阪田ファンは喝采したが、軍配は木村に上がる。のちに、南禅寺の決戦とうたわれる大勝負だった。読売新聞紙上には「坂田木村大棋戦」と銘打って二月六日付から三月一〇日付まで連載された。続く対花田八段戦（天龍寺の決戦）にも阪田は敗れた。

## 12・1 一〇年掛かりで実現にこぎ着ける

阪田三吉八段が大阪で「名人」を自称して、当時の東京将棋連盟と関西の木見金治郎八段派と絶縁したのが大正一四年（一九二五年）三月のことだった。以後、阪田は大阪朝日新聞社の嘱託として、主に指導対局などを行ってきた。

東京方の棋士との対局をぜひ実現させたい、と阪田に働きかける新聞社はいくつあったが、いずれも失敗に終わっていた。中でも読売新聞社は、正力松太郎社長の意向を受けた担当記者の菅谷北斗星が十年越しで働きかけていた。

昭和八年（一九三三年）九月五日、阪田は明治四二年（一九〇九年）から嘱託を務めていた大阪朝日新聞社を退職した。当時、およそもりそばが一〇銭、大卒初任給七〇円の時代で、阪田の月手当は一八五円だった。なお解職手当（退職金）は五、〇〇〇円が支払われた。

徳川時代から三百年以上続いた終生名人制（一度名人位に就いたら亡くなるまで名人、という制度）は、昭和一〇年（一九三五年）に関根十三世名人の大英断で実力による短期名人制へと大きく変貌を遂げる。この実力名人戦の開始が阪田の意欲をかき立てたことは間違いないだろう。

そして、その名人位を目指して激しく争っていた棋士が木村八段（三一歳）と花田八段（三九歳）だった。

## 12・2 菅谷北斗星の回顧録から

菅谷北斗星が回顧録『将棋五十年』時事通信社刊）の中で当時の状況を述べている。阪田出馬が具体的な動きになってきたのは昭和一一年の末ごろだった。

『私の所属する読売新聞社の主催であることはもちろんで、読売の希望として名人位を争ってツバ競り合いを展開している木村、花田の両八段に白羽の矢を立てた。坂田翁からある程度の内諾を得たので、この実現を将棋大成会（注：現・日本将棋連盟）に申込んだ。もとより、その前に、木村、花田両氏から、会さえ承知すればの快諾は得てあった。

ところが大成会としては重大問題で、名人位の最有力争覇者が、会員外の坂田八段に負けるようなことでもあると、たとえば名人戦で優勝したとしても、名人に推薦する上に大きな支障を

免れないからで、名人戦を独占契約している毎日新聞社（注：当時の題字は東京日日新聞・大阪毎日新聞）の関係者も加わって、種々評議が行われた。》

場合によっては脱会してでも阪田と対局したい、という木村の強い意志を受けて将棋大成会も了承し、ついに実現の運びになる。関係者で協議した結果、対局の条件は次のように決まる。

一、手合は平手（振り駒）。

一、持時間は各三〇時間。

一、対局日数は七日間。

一、指し掛けの封じ手は交互にする。

一、対局中は泊り込みとして外出を禁ず。

一、老齡（満六六歳Ⅱ数えの六八歳）の坂田翁のために付き

添いを認める（令嬢玉江さん）。

※対局場は南禅寺の中の「南禅院」奥の書院。

対局は表向き「振り駒」としていたが、実は阪田の顔を立てて木村、花田が先手番と決まっていた。

阪田は大正一一年（一九二二年）四月に花田長太郎七段と対局（花田勝ち）して以来、なんと一五年ぶりの平手戦だった。

## 12・3 後手阪田の第一手は△九四歩！

南禅寺の決戦は、阪田の端歩突きでも一般によく知られている。

先手木村の▲7六歩に対して△9四歩と端歩を突いた阪田の真意は、一五年ぶりの平手戦なので最新の定跡、研究を避けたとも、「平手将棋は攻めるが不利」という原理を実践したものだともいわれた。

木村は、この△9四歩について、のちにこう語っている。

《坂田さんは二目目に△9四歩と端歩を突いてきた。

これが問題の一手だったねえ。

この手が生きて、こつちを追いつ込むようになるとは考えなかったね。結局、この手で駒組みが遅れて、あの将棋は駄目になったんだから。あの手で随分、気が楽になったね。》

「週刊将棋」『連載インタビュー木村十四世名人に聞く③』

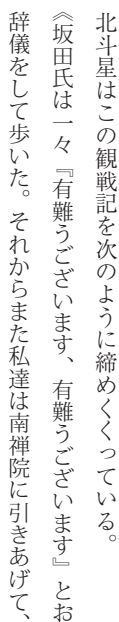
昭和五九年八月二十九日号

阪田はこの端歩突きについて、どう語っていたのだろうか。

かつて筆者は、阪田の直弟子・星田啓三八段（故人）にこの点を取材した。星田青年が端歩突きの真意を尋ねたところ、阪田は「時がたてば分かる」と答えるだけだった、という。

## 12・4 対局料は二局で一萬五千元！

この時の対局料は、のちに木村が二千五百円と明かしている（『将棋世界』昭和四八年八月号掲載の木村石垣対談「真剣勝負五十年」）。



12  
・  
5  
北斗星の観戦記

阪田の対局料については、本間爽悦七段（のち八段）が直接北斗星に聞いた、として二局で一万五千円だった、と公表している。（『将棋世界』昭和三八年七月号掲載「真説『王将』（下）」）。

《翁を愛する菊池寛氏及び読売の名観戦記者として知られる菅谷北斗星氏（故人）の奔走で、二局、一万五千円也でまとまったのである。この金額は星田六段の記憶（二局、一万円）と多少違うが私は、菅谷氏から直接聞いたのだから間違いないだろう。》

迎えの車に乗るのを待った。

南禅院は石段の上にある。小雨に煙る杉木立からは、しずくがぼたりぼたりと肩の上に落ちた。坂田氏は七日間の疲労が一時に出たか、足もとが心もとないので、令嬢の玉江さんが抱ええる様にして昇っていった。

私は後から傘をさしかけて……見るともなしに見る坂田氏の頸筋が、心なしかげっそり肉が落ち、やつれたのを感じた。私は何ということなしに目頭の熱くなるのをどうともすることが出来なかつた。

急に坂田氏が振り返った。『おおきに苦勞様でございました』と礼を言われた。私は傘から顔を出して、『しずくがひどいです』と答えた。ほんとうに杉のしずくが私の頬を濡らした。』

日本将棋連盟刊『菅谷北斗星選集 観戦記篇』

1 新聞に初めて掲載された詰将棋の解答

- ▲7四馬 △9四玉 ▲9五歩 △同 玉 ▲8六角 △同 玉  
▲7五銀 △7六玉 ▲8五馬 △同 玉 ▲8六金 △9四玉  
▲9五香まで、一三手詰め。

2 「竹内翁」とは、山形県酒田在住の素封家である竹内丑松(号・淇洲)八段のこと。

【補遺】木村、初の実力制名人に

二年半にわたる実力名人戦の優勝争いは、木村義雄八段と花

田長太郎八段に絞られる。両八段による名人位を決定した大一番は、一九三七年（昭和十二年）二月五、六日、神奈川県湯河原「天野屋旅館」で行われ、木村が勝ち、第一期実力名人に輝いた。この天野屋での大一番は、一九三八年（昭和十三年）一月一日付から一三日付まで、作家の佐々木茂索が主催紙の東京日日新聞・大阪毎日新聞に観戦記を執筆した。

- ① 文献により「阪田」「坂田」と名字の表記が混在するが、日本将棋連盟では「阪田」で統一している。
- ② 阪田は昭和三〇年（一九五五年）に名人・王将を追贈された。
- ③ 文中敬称略

## 付 将棋史研究の人々

今まであまり表に出てこなかった方を含め、将棋の歴史を研究してこられた方々を紹介させていただく（以下敬称略）。

山本 亨介（一九二三～一九九五）  
やまもと きょうすけ

大正一二年四月二九日、和歌山県生まれ。筆名・天狗太郎。昭和二十一年、大阪日日新聞社入社。二六年、サンケイ新聞東京本社入社、三五年朝日新聞東京本社入社、三八年に退社して文筆生活に入る。作家、将棋史研究家。平成七年十一月一〇日逝去。

著書に『将棋文化史』『将棋庶民史』『名棋士名勝負』『将棋名言集』『将棋・戦国争覇録』ほか。

越智 信義（一九二〇～二〇一四）  
おちの のぶよし

大正九年八月六日、東京・築地生まれ。古棋書収集家。現在保存されている棋譜は、昭和二十九年以降のもので、越智氏が初めに保存、整理した。同四四年に東京・日本橋「白木屋」（現・東急百貨店）で開催された「将棋四〇〇年展」を企画、実現に尽力。翌年から続く将棋まつりの先駆けになった。将棋史を語るうえで必ず名前が出てくる「将棋博士」だった。第二回大山康晴賞受賞。著書に『将棋の博物誌』、編著に『将棋随筆名作集』『随筆選集・将棋の風景』ほか。平成二六年一月一〇日逝去。※「将棋世界」平成二六年七月号に追悼文あり。

加藤 久弥（一九〇九～一九九二）  
かとう ひまや

明治四二年一月一日、福島県生まれ。将棋史研究家。昭和八年、読売新聞福島支社へ入社。北海道・東北総局長などを歴任。定年退職後、日本将棋連盟嘱託として将棋史研究に打ち込む。「将棋世界」に同五五年六月号から五七年五月号まで「近代将棋史年表」を執筆。豪華本「写真でつづる将棋昭和史」の巻末には、一八ページに及ぶ将棋史年表を作成した。そのほか、

「週刊将棋」の「歴史スポート」などに健筆を振るった。平成三年二月二五日逝去。

東 公平（ひがし こうへい）（一九三三～）

昭和八年七月二三日、兵庫県神戸市生まれ。木見金治郎九段に師事、上京して梶一郎九段門下。奨励会は初段まで昇り退会。日本将棋連盟職員。筆名「紅」で朝日新聞観戦記者になり、のち同社学芸部嘱託。将棋ペンクラブの元副会長。著書に『阪田三吉血戦譜 全三巻』『升田幸三物語』『升田幸三熱戦集 上下』『名人戦名局集 思い出の観戦記』『名棋士名局集 将棋あれこれ』『近代将棋のあけぼの』『升田式石田流の時代』『名人は幻を見た』『ヒガシコウヘイのチェス入門』ほか。

坂本 一裕（さかもと かずひろ）（一九二六～一九八四）

大正一五年二月一七日、青森県下北郡（現・むつ市）生まれ。青森県立五所川原農林高等学校教諭。将棋の歴史、棋譜収集に興味を持ち、雑誌「将棋天国」の編集に携わる。「近代将棋」誌にも「阪田三吉力戦譜」などを連載。著書に『将棋名匠物語』がある。昭和五九年五月二八日逝去。

森山 勝彦（もりやま かつひこ）

「神戸新聞」を徹底的に調べ上げ、その熱意は中村浩著『鬼神・阪田三吉』（講談社版）の巻末資料「阪田三吉」棋戦目録に結実した。

増川 宏一（ますがわ こういち）（一九三〇年～）

昭和五年、長崎市生まれ。遊戯史研究家。遊戯史学会会長。平成二二年から日本将棋連盟の将棋歴史文化アドバイザー。同二六年、第二回大山康晴賞受賞。著書に『将棋』『将棋2』『遊芸師の誕生 碁打ち・将棋指しの中世史』『碁打ち・将棋指しの誕生』『将棋の起源』『碁打ち・将棋指しの江戸「大橋家文書」が明かす新事実』『将棋の駒はなぜ四〇枚か』『将棋の歴史』ほか多数。

#### 主要参考文献

- 山本亨介『将棋文化史』昭和五五年  
東公平『阪田三吉血戦譜』(1)(2)(3) 昭和五三、五四、五五年  
山本武雄『改定新版 将棋百年』昭和五一年  
加藤治郎監修『写真でつづる将棋昭和史』昭和六二年  
加藤治郎監修『昭和の将棋史 不滅の名勝負一〇〇』昭和六三年  
『将棋世界』／『近代将棋』／『週刊将棋』 ほか